

ある。なお第二章・古代諸思想と養生説。第三章・道教と養生思想。第四章・仏教と養生思想。第五章・日本・イスラム・インド・ヨーロッパの養生思想とつづく。

いずれも、専門的記述であり、我が国の研究レベルを内・外に示したものと評価できる。この方面の研究や興味をもたれている自然科学者に一読されるようおすすめしたい。

(吉元 昭治)

〔平河出版社、一九八八年、B5判、八二九頁、定価一万五千元〕

### 野中杏一郎編著『医の歲月 野中眼科二百年史』

本書は、初代李杏が天明五年（一七八五）木曾菅村（現木曾郡木祖村菅）に民蘇堂眼科を開業して以来二百年の歴史を持つ野中眼科六代目の移り変わりの地域医療史大成である。上製箱入りの見事な装丁にふさわしく、内容も実に豊富である。約三十ページのグラビアで木曾から松本への野中医院の移り変わり、歴代医師によって使用された眼科医療器コレクション等私が最も関心を持つ、古医学書の数々がカラー写真をふんだんに取りいれられ紹介されている。

本文では、初代李杏（一七六五—一八二九）が文政六年（一八二二）から文政十二年迄京都で遊学、後帰郷し岐蘇（木曾）の民の為の医院、と言う意味から「民蘇堂 野中医院」と名付け、木

曾の最上流にある人口百五十戸の山村の小さな菅村に門戸を開き、「菅（すげ）の目医者」と言われた事から始まり、二代目杏庵（一八〇五年—一八六八）は、父李杏の勧めによって文化六年（一八二三）京都の高階枳園の門下となり、門人筆頭に推され、紀州徳川家へ往診するまでになっている。杏庵はまた、長崎にも遊学している。

文政十二年（一八二九）帰郷し内科、眼科の手術では評判を高め広範な診療圏を持っていた。

さらに杏庵は天保四年（一八三三）菅村藪原に私塾「民蘇堂塾」を創設し、拾数人の医師を養成している。

三代目杏春（一八四二—一八八一）は安政四年（一八五七）江戸に遊学し今日、野中家に伝わる数百冊の古医書を購入し「藪原の目医者」と称された。

更に四代目隆太郎（一八七五—一九五八）は済生学舎で学び県眼科医会、村議長等を歴任した。

五代目茂乗（一八九八—一九四八）は大正十三年東京帝大を卒業後名古屋大学講師、金沢大学助教授を経て、昭和六年帰郷し野中眼科を継承している。

戦後、松本市に診療所を移転したが、その間郡医師会長、長野県眼科医会会長、日本眼科医会理事を歴任している。

そして今日の六代目、昭和三十年東京医科大学卒業後、独協医科大学助教授を歴任し現地で開業しておられる編集者、杏一郎先生へと、幕末、明治、大正の地方史、世相の資料考証を挿入しながら、小松芳郎氏（松本市史編さん室長）が執筆を加えている。

この著書の中で最も興味を持ったのはカラー写真で挿入されている、二代目杏庵の残した、『家伝眼科秘録』と、三代目杏春の『泰西眼科全書』についてである。『家伝眼科秘録』は楠木流秘伝書であり、写本の写真を見たかぎりでは、京大図書館富士川本として所蔵される『楠木流眼療秘伝』と、おそらく同じであろうと推察する。残念ながら文中に楠木太淳に学ぶと、記載されているが、楠木太淳は一七六二—一八〇三没である事から、二代目杏庵が誕生するまでに死去しており、楠木流を直接学んだとは考えられない。おそらく考証のちよつとした、誤りであろう。

次に『泰西眼科全集』についてであるが、この写本は、宇田川榛齋（玄真）が寛政十年（一七九八）秋から同十一年夏まで約一年を費やして翻訳されたと、されるが未刊であり、本文五冊、付録一冊の計六冊からなっている。当時眼科を志して、杉田玄白や玄沢と交渉を持った、人物がおそらく玄真の訳書を書写し、利用したのであろうが、三代目杏春が江戸で買い求めたと考えれば、翻訳されてから二五年後に購入された事となる。

あるいは、二代目杏庵が写本をしたとすれば杏一郎先生が所蔵されている『泰西眼科全書』と現在、研医会図書館（静嘉堂文庫）に有する『泰西眼病方序説付余録』（表紙初めを見れば全く同文である）の内容について、ぜひとも比較検討させてもらいたいものだ。最後に三代目から四代目の間に約十六年間の診療所開設空白があり、普通ならば貴重な古医書や医療器具は逸散する事が多いのだが、おそらく三代目杏春を亡くした二十五歳の若妻なみと、親族の献身的な努力、さらに女手による「調気散」なる売薬製造

販売により逸散することはなく、また今日まで、隆盛をきわめて来たのであろう。さらにまた、昭和三十四年の現在地への診療所移転にもかかわらずこれだけ数多くの資料が残されているのは、編著者野中杏一郎先生の努力に負うところが非常に大きいと考えられる。私事に至るが私の家系も天保年間より医家として継続しているが、残念ながら二〇〇冊もの眼科古医書を持ち合わせていない。杏一郎先生とは文通により御指導を得ている一人ではあるが、愚生も眼科器具コレクションをしている者であり、大いに啓発させられた次第である。

貴重な非売品のこの御著書を寄贈して頂き深謝いたしますと共に、出来るだけ多くの人々に見ていただくため、大切に保管して行きたいと思えます。

（奥沢 康正）

〔郷土出版社（松本市）、一九八九年六月、A4判、一九八頁、非売品〕

石山昱夫・張維東・庵文喜訳『洗冤集録・洗冤録詳義』

本書はいうまでもなく宋慈著『洗冤集録』（一二四七）とその解説補遺版に当る許鍾著『洗冤録詳義』の完訳本である。監修者で本会々員であられる石山先生御自身に解説いただくのが一番であるが、不肖私がお引受けした。

本書出版の経緯をまず記しておこう。現在石山教授が主宰され